

6班 理論総括班代表者 的場先生に聞く

プロジェクトの総括にむけて A Summary of Our 5-year-project

的場 昭弘（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所 教授 / 事業推進担当者）
MATOBA Akihiro



COE最終年をむかえると、プロジェクト全体を把握すべく動く「理論総括」の班の作業の重要度は加速をつけて増してきます。これまでこの班のお世話をされていた的場先生に総括への展望を語ってもらいました。

今までのCOEの流れを見ていますと、色んなかたちでの矛盾もあるんですが、その矛盾を解決するんじゃないくて、矛盾とどう付き合ってきたかをきちんと出せれば、おもしろいプロジェクトになるかなと思ったりするんですけども…。

的場 今、大学院の授業で、ポール・リクール『記憶・歴史・忘却』という書物（久米博訳、新曜社）を読んでいます。で、たまたま今週の部分はプラトンの『パイドロス』という作品の分析です。プラトンは、ここである国で文字（パルマコン）が発見されたときの逸話を書いています。発見者は大変便利なものだと思います、それを王のところへ持って行って、「文字を発見したんですけど、それによってすべての問題が解決します」と意気揚々と述べるわけです。例えば、「文字の発見によって、今までなかなか記憶できなかったことが記憶できるようになり、記憶量が格段に増えます」と。それを聞いた王は、「いや、それは逆だろう。文字を書くことで、記憶が無くなるんじゃないか。だから、この文字というのは、決していいものじゃない」と否定するわけです。

そこで起こった問題とは、文字ができたことで、会話にあった躍動感というのが消え、まったく感動のない無機質な言葉が出現したということです。そもそも文字は、今前にいる人を意識せず、まったく別世界の人に向けて発信しますよね。話す言葉は、そこにいる人の顔を見ることで臨場感を持つ。しかし文字というのは、まったく臨場感がない。これは、人間にとって薬なのか、それとも毒なのか、という問題が出てくるわけです。

何かを記憶するために文字に書きとめることによって、本当に過去の事実を正確に伝えることができるのか、という問題がそこにあります。ちょうどソクラテスは彼以前の哲学との端境期にいるわけです。なぜならそれ以前の哲学者は、文字で表現しなかったからです。ソクラテス以前の哲学者は、書かないことで、そこにいる人たちに説得することだけを哲学の目的にしたわけですが、そもそもそれこそ哲学であったわけですね。それが、文字に書き残されることによって、そこにいる人じゃなく、誰かわからない人に向けて話す哲学が生まれた。こうして、哲学、言いかえれば西洋の学問が生まれたわけですね。それまでの学問は、そこにいる人との会話です。それ以降の学問は、まったく不特定の人間との会話です。こうして文字に書き残されることで、ソクラテス以前とソクラテス以降の哲学は大きく変化したわけですね。

ここに、当然いろんな問題が表れています。文字を書くということは、表現できないものまで含めて文字に押し込むことを意味します。例えば、そこにある本箱を本箱、カメラはカメラと表現する。実はこう表現することで、なんとかそこにあるものを表現できた気になる。しかし、それはここにある本箱やカメラを意味しているわけではないわけですね。そもそもそれだけではそこにある本箱やカメラを本当に認識することはできないのです。ただ文字に表現することで、形だけはなんだか分かるという曖昧な認識ができたという程度にすぎないわけですね。ここに文字の限界があるのですが、それは人間があるものを認識する限界というものを表現しています。つまり

外の世界にある本箱という現実と、言葉によって表現されている心の中の世界とのズレです。心の世界というのは、文字や言語を通じて理解できる悟性の世界であり、外の世界とは身体を通じて感覚的に理解する感覚の世界です。ソクラテス以降の学問は、この頭の中の世界を問題にするようになったわけです。そういう意味で、非文字という私たちの研究テーマは、まさにこの文字で表せない世界、つまり頭のうちにある形而上学的世界、ではないものを分析することになるわけです。外にある生々しい生きた現実、触って、こう、冷たいとか熱いとか感じる、こういう世界を分析の対象とすることになるわけです。これは大変な問題、真っ向からこれまでの学問の方法に立ち向かうことになりかねないわけで、最初から大変な仕事になることは、わかっていたわけですね。

とはいえ、まず話すこと、つまり今しゃべっているこの言葉とそれを文字という表現形態に直す間にある違いがあります。話すことは、相手の顔を見たり、状況で判断するので、非常に生きた感覚に近いですね。確かに頭の中で文法的に構成されている点において、文字に似ているわけなんですけれども、しかしながら実際にしゃべっている人は文字からかなりずれています。その意味で、会話は文字以外の世界に近いと思います。もっとも、今回私たちの具体的な研究テーマの中には、この会話というものの、すなわちこの文字ではない世界、が含まれません。しかし、われわれのテーマは、この外の世界、感覚的な世界というものを、どう認識として取り込むかというところで挑戦しているんだと思いますね。これはとにかく、哲学最大の課題であり、2500年の歴史の中でさえ解決できていない問題なのです。

今言われた文字と言葉というもののほかに、例えば音楽とか身体技法といった表現文化もあります。それを文字発想の中におさめてみようという試み、それをその分野に応じて、どうまとまらないかということ、少しでも洗練されたかたちで出せれば、と思うんですけれども、まったくフリーに、試みとして自由にやっていいよというと、逆にもうカオスだけになるみたいな。

的場 そうですね。ですから、カオスに陥らないために具体的なもの、例えば、机なり、イスなり、具体的なものを取り出せばいいのですが、それだと百花繚乱になります。もうひとつ切り替えて考えると、基本的に私た

ちの研究分野は、歴史学だとか、民俗学だとか、あるいは人類学の分野の研究ですね。そうだとすると、文字であるか文字でないかという対象の問題をあれやこれやと問題にするより、それを認識する側の頭の構造の方に、むしろ問題を持っていった方がいいと思うんです。つまり、民具や身体がどう非文字であるかという問題よりも、民具や身体をどのように理解しようとしているのか、どのように認識しているか、誤解も含めて、そこらあたりの方を、むしろ問題にする方がいいのかなと思います。この前、国際シンポジウムでもそういう話をしたのですが、どう認識しているのかという点が、まずはキーポイントになるんじゃないかという気がしています。

反発しない、でも融合もしないんだけれども、なにかつなげる橋を模索するというのはできるはずなんだけどな、という気はしたんですが...

的場 認識論的立場からすると、認識にはその時代の時代性があるし、認識するための様々な時代的制約があります。だから、認識しようとするにはある意味で時代的制約を理解することです。だからいずれの時代にも共通する認識法則などないと考えた方がいい。同じような記号があったとしても同じように認識しているわけではない、意味することがまったく違っていると、考えるわけです。しかしそうするとなかなか研究はしづらい。

例えば、4世紀、5世紀の農民も、民具を私たちと同じレベルで認識していると考えた方が、説明としてしやすいでしょうね。だから、ある道具を見てこれは間違いなく野良作業の道具で、こんな風に使う。大きい小さいか、あるいはどういう風に使うか、若干差はあるけど、基本的には我々の経験内で考えよう、という発想になりますよね。しかし記号論的に考えると、そうとは言えない。そのように言えるためには、それを道具として使うという歴史的認識が必要です。例えば、河野通明先生のお話で、民具を普及させるために民具の縮尺モデルを配ったという話がありました。しかしモデルという発想自体が、近代の発想ですね。また今であれば宅配便で送ればいいのですが、交通手段を考えても、簡単ではない。古代の様々な事象を近代的な概念や発想で把握することには注意をしなければなりません。もう一回古代の歴史状況、そして彼らの発想に遡って、チェックしないといけないでしょう。こうした意味を精査しないとそもそも

証明にならない。つまり、いつの時代も同じ人間がいて、同じように発想するという考えは、歴史を説明しようとして歴史を否定してしまう。じゃあどうやって証明するのかというと、そこに深刻な問題が出てきます。でも、そこそ、実は私たち非文字研究が貢献する最大のポイントがある。つまり、たぶん古代の人は、同じ民具でもまったく違ったものとして使っていて、違ったものと見ていただろうと考えるわけです。そして、違ったものをどう理解するかということが、私たちの研究ならば、まずは今までの発想を変えてみる。そうすれば、これはすばらしい研究になるでしょう。

文字と非文字という言葉を一応は使っていますが、め場先生の言われるのは、その認識のあり方がテーマであるという部分があるんでしょう。

め場 ええ、ですから、対象はなにかという問題ではないわけです。対象をそれぞれやること、たとえば身体技法をテーマとしたり、景観をテーマとしたりすること、それはそれとして大変興味深いことです。しかしそれを理論的に分析することは、それをどう認識するかということ、つまり解釈の問題になるわけです。そこをポイントにすれば、民具であろうと、風景であろうと、あるいは、絵画であろうとも、共通項が見出せるだろうと、そういうところから、そういう方向から考えてみようと思ったわけです。神話と歴史という相対立する二つの分野はありますよね。これは、宿命のライバルです。しかしこれは時代の表現形式の違いに起因するところが大きいわけですよ。ある時代までは基本的に歴史学は神話であったわけです。それは、表現媒体として神話という方法しか持っていなかった。つまり、近代の合理主義精神を持っていないがゆえに、あることをいわゆる事実認識として表現するという志向的な価値観がなかった。だから、事実認識よりも、物語的な表現力に価値を見出すわけです。つまり、私たちは今、合理主義的世界に生きています。だから文書資料に基づいて、事実を克明に知ろうとする。だから、きわめて合理的に説明します。しかしこの合理的説明は、その合理的な説明という価値観を持たない人たちにとって、ほとんど説得力を持たない説明です。合理的でない説明をしたほうが、彼らにとってははっきりする。つまり、その方が、聞く気になるし、理解できる。むしろそういう方が説得力があるわけですよ。史料による歴史は聞いているだけで眠くなるけれ



呪力を宿す文字
かつての鴻巣警察署（埼玉県）のポスター。
「悪魔病魔除之警札」の文字が視みを利かしている。

ども、突然、空から神が降りてくるような話は、つまりメタファーであったとしても、その方が効果的です。最初のソクラテスの話に戻ると、聞いてくれる相手がいれば、話にはレトリックが必要となるわけです。聞いている人は必ずしも、近代的な価値観、すなわちことの是非々々という客観性を求めている。過去の人々は、その意味でまったく別の世界に生きていたとも考えられるわけです。別の世界を認識するというのは難しいことです。私のように詩的センスのない人間が、外を見ていたとしても建物ぐらいしか眼に入らないのですが、感性の豊かな人には別のものが見える。それを見ながら詩を詠んだりする。歴史家はどうやら近代主義に凝り固まってしまった。19世紀に支配的になっていく、客観的な科学主義にはまってしまったために動きがとれなくなったんです。私たちの頭の中にある記憶の世界は、まさに神話の世界にたぶん近いと思います。誰も、合理的かつ計算的に、頭の中に記憶を押し込んでいるわけではなく、非常に曖昧な、本当にあったかどうか分からないものも、自分があったと思って記憶してしまいます。彼は嘘をついているわけではないわけです。話をする分にはこうしたことはたいした問題ではないわけで、相手と話がうまくいっていることの方が重要なわけです。そうした会話の中であえて正しいかどうかを問いただすことは野暮です。そ

うすると人間関係は壊れる。このことに、歴史学は柔軟になるべきだと思います。歴史学は科学主義に墮すると、犯罪を問いつめ責任を追及する大審問官になってしまう可能性がありますよね。しかし、大審問官は自分の正しさを絶対的に確信しているわけですが、実はかなり曖昧なわけです。だから、非文字資料の研究はその意味でも、これまでの歴史学の方法、つまり合理主義的方法に疑問を提言することができるわけです。まさに、文字、記録の裏を探ることで、そういう側面を見つけ出すことができるはずですよ。

例えば、昨年10月の国際シンポジウムの報告で私が興味深く聞いたのは、韓国から来られた方（金光彦先生）の報告です。民具の道具以外の意味を問いただしていましたね。つまりそこでは農耕の道具ではなく、ある社会の人間関係を表すメタファーでした。つまり農民にとって、ただの道具ではなく、もっと奥の深い、様々な関係を表す表現媒体だったわけです。これは非文字というものの可能性を秘めた報告だったのではないかと思います。要するに非文字資料という課題を出しながら、われわれは意外と文字的、すなわち合理的に発想してしまうわけです。文字というのは対象を合理的にとらえようとしませんから、意味がかなり限定されてしまいます。何か規範的な意味をつくってしまう。規範を超えた世界に踏み込むには、そうした規範を超えた論理というものを導き出す必要があると思います。

近代というのは強迫的なまでに、固定化を求めます。当然それには反発が出てくる。それは場合によっては、神話的な性格を帯びるかもしれないのですが、でもそれは近代の中にある固定化への衝動の存在ゆえに、あぶりだされてきた神話性だとすると、それも基本的には近代ということになりますね。

的場 そうですね、どこまで行っても近代から出られないのかもしれない。それは当然の限界だともいえます。過去は現在に生きている私たちの頭の中にしか再現できないのですから、当然近代に生きている私たちのイメージが反映せざるを得ないわけです。

このテーマには本質的に、近代性をどう理解するかみたいなことが、べたっと裏側に引っ付いている…。

的場 そうですよ、ええ。ですから、先ほどの『パイドロス』の中で、ソクラテスはこういうわけです。自分

がどんな風にして人に話をしているか。実は相手のレベルを見て話をすると、相手がわかるレベル、要するにおばあちゃんの前だったらおばあちゃんたちのレベルに合わせて話をします。説得というのはそんなもんで、弁論術とはそんなもんだ。だから、弁論術というのは、実はこれは重要なことで、相手にあわせる。客観的な真実なんか、そもそも意味がない。ところが、近代の私たちの学問は、こうした生きた人間を相手にする弁論術というのを失った。今大学で教えないですよ。修辞学もないですよ。あるのは、とにかく説得力のない機械的な文章を書くだけ。無機的報告書類の山ですよ。

俗に言えば、論理で説得されても、感性は反発するということはあり得ます。

的場 まさにそれこそ、感性の世界から論理の世界に移ることによって失われたものですよ。それは、はっきり大学の学生の反応に現れているわけです。「先生の授業つまんない」と。たとえ面白くするために新宿へ出かけて行ったとしても、先生が単に知識を媒介するだけで、生身の人間としてその魅力を出さない限り、つまんないですよ。あることを媒介するだけでは何も生まれない。学生の分かるレベルで説明してあげるしかない。客観的な真実というのは、ボンと外からしゃべる概念じゃなくて、その学生たちの分かるレベルに入れられない限りほとんど無駄であるわけです。

あともうひとつ、前から気になっていたのは、なにかの折に的場先生が言われた、こういう文化の研究をやるときに、政治的なファクターというのを無視したら、ちょっと能天気じゃないかという御指摘なんです。

的場 哲学の中に存在論という分野があります。例えば、この茶碗はどこにでもある茶碗ですが、そこに置かれている状況というようなものを持っている限りにおいて、他の茶碗ではない、具体的な茶碗ですよ。私たちだって、ものを書くとき、一研究者として客観的な立場にあるつもりでいながら、ある立ち位置に立っているわけですよ、それぞれ政治的な意味の立ち位置もあるし、経済的な立ち位置もある。政治的というのは、まさにその立ち位置、存在について議論するということです。そこに置かれている場、客観的に空虚に置かれているのではなく、何らかの役に立つために置かれている。人間の場



営業に励むエビスさま
(かつての引札から)

エビスさまとは現世利益を願うシンボルでもあろうが、エビスさま自身が帳簿をめくり電話をかけると、そこに妙な生々しさがあらわれる。信仰の世界と現実の世界は、交錯のありようによっては不思議な不自然さをもし出す。

引札の左側に「近江國愛知川町字中宿」との文字が読める。現在の滋賀県愛知(えち)郡愛知町のことだが、この町に含まれる旧愛知川村が愛知川町となったのは明治42年(1909)のことだから、この引札がつくられたのはそれ以降ということになるろう。

合、非常に狭い意味で政治的な状況として表れ、もっと広い意味で全体の社会における立ち位置として表れるわけです。例えばあるものを記録しようとするとき、どれもこれもすべて記録しているわけではなく、記録すべきものと記録すべきでないものを分けて記録するわけです。なにを残すかは意図的ですよ。その意図というものも、私たちの研究は探らなければいけない。そういう側面を抜きにすれば、われわれの研究は空虚な事柄の羅列になりかねないと思います。

抑圧されているというのは、自己規制というのもあり得るわけですよ。自己の存在自体も、周りの状況が深く及んでいる部分があるわけで。

的場 ポール・リクールは先ほどの書物の中で、「忘却」について触れています。人間は記憶すると同時に、忘却もします。記憶の中に残っているものは、客観的なものではありません。記憶は、想起するたびに、別のことが刷り込まれていくことでどんどん変化していく。最初にあった原記憶というものが、どんどん薄れて変わっていき、本人も忘れてしまい、いま記憶していることが真実だと思っている。その中で、なぜ忘却したかという問題がでてきます。語りたくないこと、それをいつの間にか忘れていく場合、意識的に忘れてしまう場合、というのがありますよね。こういう忘れていくものを記憶として再び持ち出すことは可能かどうかという問題です。要するに、強制的に忘却されていく記憶の問題。意識的には思い出せない、なにかトラウマのような潜在意識の彼方に忘れてしまったもの、こういうものが人間の認識の深部にあります。

個々のテーマでこれだけやりましたということ、単品で並べても、本当はこのテーマの本質とは無関係なんでしょうけれども。

的場 理論班というのはその意味で微妙です。そもそも各班の理論を統括する形なんかでまとめることなどできないわけです。グループにもそれぞれ理論があるわけですから。理論がない個別研究などあり得ない。それなのになぜ理論班が必要なのか。できたこと自体他の班の理論を批判するためであったわけです。だから理論班に対する風当たりは強いわけです。じゃあ理論班の役割とはいったい何なのか。皆さんは、なにか現実とかけ離れた、訳のわからないものが出てくるんじゃないかと危惧されている。まあ抽象的な議論がいやならば、何らかの形で、それぞれが、自分の研究の枠の中で、理論を提起すればいい。たぶんその形で出てくるしかないだろう、という気はしているんですが、しかしそれではバラバラであるわけで、強引に理論班は批判を覚悟の上でまとめをせざるを得ない。

理論班というのは、それぞれの関係性がなにかということを見ていくんでしょうが、逆に、ほとんど関係がないという結論が出たという場合は、それで行くしかないんですね。

的場 と同時にやっぱり、理論的な総括もしたいという気もします。それが汎用性があるかないかということはあるでしょうが、そうした理論から見ると、ちょっと自分のやっている研究は危ないな、証明になってないな、このままじゃだめだなということを、やはり理解していただく必要はあるわけです。差し出がましい話ですけれ

ども、そういうヒントになることを提案するのが、たぶん私たちの班の目的ですよ。そういうことが出来れば、たとえ机上の空論であったとしても、何らかの意味を持つのではないかと思います。

機能としては、相互刺激の場がそこに生み出せれば、もうそれで…。

め場 そうですよ。だから、嘸みついてくる人は最高ですよ。理論班の役割はたぶん、それぞれが、マニアックな世界の中でやっていることを表に引きずり出し、こんなことをやっているんだということを、わかるように説明するという、一種の広報的活動でもあるわけです。COEの外部評価の際、キーワードを作ったらどうかというのがありましたよね。非文字ではたぶん誰も検索してくれないだろうと。たとえば、「記憶」だとか、「忘却」だとか、そういうキーワードを使うとアプローチが増える。しかし、研究者の立場から見ると、「記憶」や「忘却」なんて、研究の内容を表さないではないかという声もあるでしょう。これはあくまでも情報を受ける側の関心に狙いを定めているわけですからそれも致し方ない。こういう共同研究の場合、キーワードを作ることで逆に自分の位置が分かるのではないかと思います。ひとつのキーワード、かなり汎用性のあるキーワードを作ると、お互いの関係がよく分かる。

数字の世界を例としてとるところですよ。非文字は整数を除くすべての数字であるとしましょう。1、2、3という整数、すなわち文字があると、非文字は整数外の全部を対象としているわけです。整数外のものを対象としているといいながら、一方で、具体的にはいくつかの数字、たとえば1.5だとか2.5だとかを選んでいるわけです。だから、それ以外のものを説明するのはかなり困難なわけです。整数を扱うように帰納的にやったのでは説明できない。このいわゆる具体例の背後にある空間ですよ。例えば1と2の間にある空間をどう説明するかというとき、必要なのは帰納的方法ではなく、もっと抽象的な方法が必要になる。ここがたぶん理論班が補う部分です。

その帰納レベルであったことをそのまま抽象的なレベルにもっていけるような理論を組み立てられればいいんですが、それができなければ、たぶん非常に個別的な部分に分かるだけになる。三つか四つの例を提示すれば、それで分かるというだけでは説得力に欠けるわけです。

そこはやはりそこを超えるような、つまり三つ四つの例もあるが、そこからもっと広い領野が見えるようなものがないと、多くの人が関心を持ってくれないだろうという気がします。

こうしたかなり曖昧なタイトルをつけたことによって、それぞれ自分のやっている研究が客観的にどう見えるかということが分かったという点では、非常によかったと思いますよね。COEがなければ、ほかの分野の人がそれぞれの研究に関心を持つことはなかった。これまでのいわば職人的研究スタイルを超えて、なにか、それぞれの分野が横断的に理解できる可能性が開けてきた。そんなチャンスができたという点では、非常によかったんじゃないかと思いますけどね。

対象を限定しないと「方法」というものは立ち上がってこないと思うんですけども、その限定の仕方ですね、従来発想的なテーマ、たとえば民具であるとか、写真、絵画であるとか、というよりも、さっき言われた、認識のあり方がどっかに引っかかってくるようなテーマ設定とか、それから近代というのがなにかみたいな問いが明確に問題認識としてついている作業のほうが多ぶん、より現実的な展開力をもつのかもかもしれませんね。

め場 そうですね。いずれにしてもわれわれは21世紀前半の今を生きているわけです。だから、現実との接点を失うことはできない。接点を失えばその研究自体も需要がなくなるし、研究自体の意味もたぶん問われるでしょう。やはり存在していることの意味ですよ。21世紀の研究者である私たちは、何でこんな研究をしているのかという問題をつねに問い続けねばならない。そうでないと研究自体が意味を失っていく。その意味でCOE研究は大きなチャンスを与えてくれた、と言えないことはないですよ。評論家的な研究になりかねない。しかし評論家的、言い換えればディレッタント的であることは、むしろ大いに結構なことであり、悪いことじゃない。大学の研究者が自分の専門分野を持っているのは当たり前ですよ。当たり前のことだから、それだけをやったのでは共同研究にならない。そこを突破する可能性を持つことで、研究が開かれる。これは本当のチャンスであり、こういう場でしかできないだろう、という気がします。